

「尼崎」…地名の由来

784年の長岡京遷都にともない神崎川と淀川をつなぐ水路が開かれたことで、神崎川は都と瀬戸内・西国を結ぶ交通路となりました。平安時代後期には市域の神崎・今福・杭瀬・長洲・大物は、川船と渡海船を乗り換える河口の港として栄えました。尼崎の地は港町として発展し、鎌倉・室町期の史料には「海士崎」「海人崎」「海崎」（あまがさき）とも記されています。「あま」とは、古代・中世には漁民・海民を意味します。つまり、「あまがさき」とは漁民・海民が暮らす、海に突き出た場所ということになります。やがてこの尼崎には、大覚寺や本興寺を中心に、中世日本有数の自治都市が形成されました。こうした神崎川河口の繁栄に加えて、市域では古代以来各所に荘園開発がすすめられ、やがて近世には豊かな農漁業地帯、近代には日本を代表する工業都市のひとつとなっていきます。このように「尼崎」は、川の流れ（河川流域の繁栄）、時代の流れ（時代の社会的背景）とともに発展してきたと言えます。

尼崎の地質

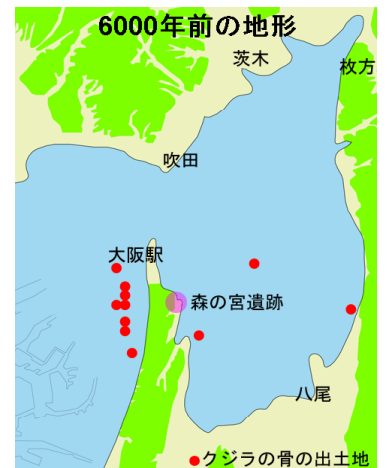
私たちの住む（あるいは働く）尼崎の地面や地下はどのようにして形成されてきたのでしょうか。「大阪平野」のうち、東は千里丘陵、北は北摂山地、西は六甲山地、南は大阪湾に面する東西約17km、南北約15kmの平野部は「西摂平野」と名付けられています。うち武庫川・猪名川の下流域を占める平野部は「武庫平野」と呼ばれ、さらに武庫平野南部においては低平な地勢を指して「尼崎平野」という名がついています。つまり、地質学上の区分は、大分類（大阪平野）—中分類（西摂平野）—小分類（武庫平野）—最小分類（尼崎平野）となっています。（*分類は学術分野によって相違があります）

この尼崎平野ですが、詳しくは東西2つの部分に分けられます。平野西部を流れる武庫川は、固定された堤防がなかったその昔、現甲武橋付近から多数の支流に分かれ洪水を繰り返しました。その結果、六甲山地の風化した花崗岩による多量の砂礫が運搬・堆積され、広い三角州を形成しました。一方、東部においては、猪名川は北摂山地に発した運搬土量が極めて少なく、三角州が発達せず、海成の沈殿泥でできた「尼崎粘土層」が厚く堆積しました。

このように尼崎平野は、河川による堆積作用によって形成された「沖積平野」と海浜堆積物によって形成された「海岸平野」で構成されています。尼崎平野の形成には「河川の三作用」や地球の寒冷化・温暖化にともなう海水面の変化（海進・海退の繰り返し）が大きく関係しています。さらに地下には幾種類もの地層が重なっています。層ごとに地質や出土品などを調べることで、地形図上では読み取れない当時の様子を詳しく伺うことができます。

図：6000年前の地形 写真：発掘調査に参加する中学生

尼崎市立地域研究史料館HPより転載



☆海進・海退の状況

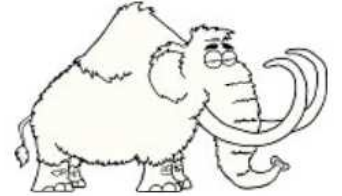
30,000年前	「伊丹海進」 伊丹粘土層堆積（海棲の貝の化石を含む青色粘土層）
20,000年前	伊丹礫層形成、最終氷期（ウルム氷期）最終冷期 海面100m低下（海退）
1万8000年前～	徐々に温暖化してきて、再び海進状況
6,000年前	「縄文海進」の最高潮



海進・海退による地形の変化

20000年前は、海面も今より100メートル以上低く、大阪湾も陸地でした。日本とユーラシア大陸も陸続きだったので、ゾウも人間も大陸から歩いて渡ってきたようです。大鳴門橋の橋梁工事では海面下40mの地層で石器が出土しています。したがって大阪湾の海底にも多数の遺跡が謎めいたように眠っているはずですが、私たちが知り得る歴史・史実は未だに全体の一部に過ぎないようです。

6,000年前はどうだったのでしょうか。図にあるように生駒山のふもとや吹田付近まで海でしたから、尼崎は跡形もありません。このような海進・海退の繰り返しは、「波浪による浸食でつくられた砂層または砂礫層」と「沈殿によってつくられた粘土層」の互層(互い違いに重なり合う地層構造)から伺い知ることができます。



地層が語る光と影

「尼崎粘土層」は、未固結で水分を多く含んでいる軟弱地盤です。地下水汲み上げが大正時代～昭和30年代の長期に渡り、大きな地盤沈下を引き起こした結果、市域の約3分の1が海拔0メートル以下になってしまいました。しかも、不均等沈下を起こすので、地面がひび割れたり、建物が傾いたりしたところもあります。蓬川・庄下川なども自然流下できなくなり、浄化作用が働かなくなったことが汚染に拍車をかけました。大物川に至ってはゴミため同然となったため、埋め立てられて廃川となりました。このように地層の活用(地下水汲み上げ)が、逆に深刻な事態を引き起こしました。古くから利水によって発展してきた尼崎ですが、自然災害や人為災害による治水対策に追われてきたことも事実です。

遺跡保存の裏側で 保存か開発か…壮絶なせめぎ合い

田能遺跡は、昭和40年9月、尼崎市田能字中ノ坪(現在の田能6丁目)尼崎・伊丹・西宮三市共同による工業用水園田配水場の建設工事中に大量の弥生土器が発見されたことから、その存在が明らかとなりました。特に注目されたのが、木棺の発見です。木は腐りやすいため、それまでは推測でしかなかった弥生時代の木棺埋葬の風習が初めて具体的な形で証明されました。木棺墓のうち二基の被葬者は白銅製腕輪、碧玉製首飾りを装着して埋葬されるなど、この時期の墓制、集落と墓域が解明されました。考古学上において重要な遺跡で、69年に国の史跡に指定されました。

このように画期的な発見であったのにも関わらず、その裏側には、遺跡保存派と配水場建設派との攻防、せめぎ合いがありました。当時の日本は高度経済成長の絶頂期で、配水場建設は阪神工業地帯に不可欠の一大プロジェクトだったため、また、当時の尼崎市は工業用水としての地下水の使用による地盤沈下に悩まされていたため、工事は緊急性が高いものでした。そのため工事を中断して発掘調査を行なうことはできず、工事車両に追われながらの緊急調査が10月から開始されました。調査は、「ブルドーザーに追い立てられながら…」「土器がバリバリと壊されていく中で…」などすさまじい状況の中で、寝る間も惜しんで行なわれたということです。まさに日々苦闘です。

調査には、一般市民や学生など多くの有志の方々の参加もありました。調査費の少ない中で、手弁当での参加や炊き出しなどの協力を得て、貴重な発見が続きました。次第に新聞・テレビを通じた報道が行なわれるようになり、遺跡に対する関心がさらに全国に拡大していきました。市民の間では遺跡を破壊から守り永久保存を訴える声が高まり、重要性を訴える講演会や保存の署名運動などが進められました。昭和41年6月、市は建設予定区画を変更し、遺跡の保存が決定されました。地層が語る歴史には「表と裏」「光と影」があり、それぞれに人々の苦労や様々な想いが込められています。